口語訳

大和日記大略

義兵趣意大略

文久三年癸亥八月大和國ニ義兵起つて二万廿三人ばかり

不言洞文庫

口語訳

義兵起意大略

文久二年癸亥八月大和國義兵起つて二万せを倍す公しき
幷平忽ち国に満ち旗を見耳に金鼓を聞く古人亦謂治極り亂起
入乃金を宜し天理の極り也陰陽大反元人事も起る癸亥
甲寅以来外夷の患し頻りに一天萬土乃
聖帝保〜 叡慮を強まるに幕府摂夷の
勅を下され〜と雖も幕府固循征夷の職を忘れ敢て
勅を報〜ず兵庫安藤同部坂男の輩女史を以て密を造して
朝廷を惑し公論正議の人を亡ぼし遂に夷狄の極
務を成さんとす又亡すべき幕吏尚先に[illegible]
保〜て郎 朝廷を謀り奉る伏て仰く
逆鱗あらせられ〜尚 忍ぶべき一橋慶喜公
幕を補て速に膺懲の師を挙り外患を除かんを慮歳
勅下されて後女史吏を〜て報〜ず剰忍者も屡
帝を誠〜ず或小笠原図書暴悪を企て[illegible]松平春嶽
逆謀を以て迫り奉らんと欲〜 神列実陸沈せんとす雖然
天道の清明なる右等の女史謀忍を高所し其悪を全ふす事
ふ能三條殿錦小路殿烏丸殿東久世殿を始め正議の堂上廿
四郷並長州一藩を他天下の諸有志公道平直忠ある
王室を尊び奉り〜る所〜 御親征
伊勢太神宮に行幸夫より直に大和国 神武天皇の陵に行幸
御滞輿 御軍議 御評定を〜せられ〜まるの志方
八月十二日 伝出天下勤 王の士民愁眉を開き独を立て
乗〜まし〜もの〜ると雖ども又竊思惟外に拙前謹列金鼎
を始め幕の女史輩蜂の如く国に満ち乃行郷雲霧を〜一旦新然 伝出
強て其実行並に宸襟を以て速に行はる所勢に堂上中川宮一條殿二條殿徳大寺殿
中川宮鎮西大將軍宮に詳議の上
御親征中に
伝出たる小倉件の事すら数十品を
御底意一国に[illegible]小の女史急変
御親征

所にまもられ難し又薩摩思惟外に報前藩隠分倉庫を始め諸藩の共業蜂の如く因幡に神川宮一條殿二條殿德大寺殿乃好郷雲客一旦新然

伝出たる小倉一件の事すら数十品を

強て其実行並に反対を以て重大の　御親征中に

速に行はるべき形勢に至りしを神川宮鎮西大将軍宮を侍医の

御底意一関白を始め内外の共徒急度　御親征を防まゝん

多数然て時に乗弱の堂上方に見を奴い因幡の油断せんや見又

歎然然る時に折角

伝出たるも　御親征行はるす

王威海内に充満し四海　王朝を怪蔑して竟に夷狄の

術中に陥らんと嗚呼方今世上の形勢既に自ら倒れ乱を醸すと

いへ列藩諸侯舊臣諸の関係なる議論盛んなるも

日月を送る陽に共に共に益共に成正ます〳〵憤激

海内尾解目敵とする様表に如なるも〳〵

是議論を日月を送るの弊也故に今日中に議論を周旋する共

実に海内一致に至るべきん是亦天戈に向ふすんば止まる所を知

を動すに速なれ　朝廷人望の帰する所幕府民怨の所

王威の立まる知〳〵若天戈を動すに迅速なる好策悪計を企

深く熟して四海尾解に至らんと必然の形勢也今日尚つまり勅

王を志る為に山崎一日信親観形勢すんや迅速義兵を

挙て天使を諸〳〵天の情を四海に告ぐ因備の事を

死地に陥るべきこと　鳳輦を迎まゝ発行して

是言なり　御親征うち帰術業也この先見を以大和

国に於て義兵を挙たるは是則趣意の大略也

文八月十四日

義兵の始末侍中山前侍従殿徳光卿に菅原侍中統殿に付法

藩の有志士を信ずべきに士分吉村虎之助美家又木村楠馬

伊予吉田藩三田宮兄池内義之鳴浪の田所嘉部郡長信吾

岡加助内谷吉部嶋村省吾沢村寿之内外藤清寛石川一郎前

島原藩尾崎義五郎保世連矢列川左衛松本謹部保義也

口語訳

死地に落ちんとせしも　鳳輦を迎へまゐらせ　人民を安らかにし
旦三奇なる　御親征のうちなれば術業也　この先見ある大和
国に於て義兵を挙げたりしは則趣意の大略也

六月十四日

義兵の初め大将中山前侍従殿徳川慶喜に対し奉り発駕せられ
播の有志士を集めらるゝ由にて赤松村荒木部兵衛殿木村楠弓
衛殿次に播磨国宍粟郡池田義右衛門殿鴻巣田新蔵殿那波佐吉
伊吹殿吉井左衛門殿下総殿福島本助前田鉄弥安
岡加助田谷部嶋村省吾沢村吾左衛門殿小田切織部寛石川一郎前
島原藩尾崎為吉部保世建奏別荒屋庄右衛門殿本庄藤部伊蔵殿也
宍戸左近部滝後久留米藩吉塚田陶田酒井傳蔵部芋田門吉中屋七
諸左部荒巻茅部江藤種八郎川佐吉郎藩家森山松蔵（丹後の間の誤か）
滝前吉田茂蔵服部武志田谷雄部利治保作河田
住人長野一郎田中楠助等於て
於て
吉村虎吉部霜
渡部
各大坂に
日十五日

四時前後和泉国堺に大坂に安藤帯刀殿高屋
於て
夫度を調ふ玉薬等倉の新おゝ求め
数
和泉
日
永急市用に
長州
十六日

四村源河内玉穂山に寺院に陣を
吉部

口語訳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

口語訳

[illegible]
[illegible]
[illegible]

口語訳

加えられる

十八日、十九日、造橋井寺等停止

給料領国略五人の首を五条所の辻に懸け、流れ札を添えられ、「夫の在所村の人が悪く、幕府に対し、趣旨を守らず、天領の百姓を悪しくする人の在所を尋ね、制札を破り、苅田の年貢米を免除し、人民を安堵し、旗指物を立て、三在の代官、田原左馬之助、安部斗右衛門、中川宮二條殿、三條殿、徳大寺殿、醍醐殿、四辻殿、東園殿、柳原殿、烏丸殿、万里小路殿、高倉殿、日野殿、勧修寺殿、中山殿、櫛笥殿、押小路殿、清水谷殿、綾小路殿、冷泉殿、東洞院殿、高辻殿、烏丸殿、堀川殿、油小路殿、西洞院殿、高倉

口語訳

同沼部大炊助安田義定江の屋西田仁平太郎橋本次郎
口志世余人原田兵衛尉忠直以下加之

廿日

立係田を館として武州安房守忠綱郎等郎子
久留米荒巻手三郎同別藏人宗綱四郎以下
十騎ばかりにて多賀谷口新坂わたり高麗
廿一日廿日宿を立て天の川辺に陣取

坂わたりは天の川村の辺にて四方絶壁のめぐり要害誠に堅固
なり坂東の口わたりは川越の中騎ばかりの口おのおの十騎ばかり
の乃至の吉村弾正尉源信田連合を以て十騎ばかりにて戦一番
を強て勝て近て十騎ばかりにて及び戦也

一武州那須信濃守資隆の嫡子太郎資隆武蔵国住人
王三義兵衛尉の為勢五騎三疋米百石弾正忠甲冑
百領大小百領鉄砲百挺鎧百領甲冑
三郎大炊助鉄砲百挺鎧百領甲冑
三郎大炊助鉄砲百挺鎧百領甲冑
三郎大炊助

も迫ってまから伊賀も農兵を二千ばかりと雑兵の三百人
二千津川安芸守を城方の河内の安芸守と田丸殿の人を捕虜として
諸城へ分けて番兵を置くこと

口廿五日

松軍勢百人計り卒し立て伊賀上野へ振り出され
京師中川宮の命令を以て別郡出張の風聞
既に五所ゼ中に迫り十津川の民を
勢揃ひ致せと云ふ人元二人の長を立て
旗振風し数しきりに人を
要害拵へ故に十津川の雑兵の地形也
ふもとまで三里三町程の所
松軍勢五所の和州迫りて言ふ
五十人計りを捕虜にして
義を言ふ故に小性を勤し
高取城の番兵
中に敵を攻めて大和の民情を
老人婦女子迄を
言ふ
京師に
心剣に
松軍勢
京師の
松軍勢
先生
大和軍勢
おせす
先生

口おしい。

六月四日松軍勢を攻め落とされ
はれ敵を攻め落とされ
先生
十津川の農兵
先生

口語訳

[illegible]
相ゑ通とは不相揃ゆえ一戦に及ぶべき[illegible]
して軍卒大に労れ[illegible]

口語訳

六月廿日、敵軍を攻め落とし、[illegible]
[illegible]
先を強発つるべし[illegible]
[illegible]
[illegible]

口語訳

集まる者は、[illegible]
宅に泊り翌五日伊勢へ引越き、書付を加へ伊東の玉一ツ出遣
はく命じ言葉をしあわせる
一去村家来横山次郎右衛門人を遣り別の者と入れ替りの
命や情かりん迎えて行方知れざるる
石川法師命令分別分郡山表探索の五人を出し伊東後
跡を追ひ先列屋伊東を也も郡山表戦場へ向
同廿七日
先使の者は五人伊東へ行きまして福宿使の者も出て天す
出て引揚る
同廿八日　市親御出立　朝廷の政治
長列も引揚て不そ法方に有り者有り郡方に
御教の者を蒙らしめ心得也を同兵分を廣げ人の者かく伊
見るは川山中行紀機を見を紀列形宣者を討殺す郡を出九列
伊法再び義を蒙りて社二郡を出て既に出発あり日々天の
出たる七殿村に宿陣
同廿九日
長殿村に南陣伊東の変事の報を聞く天の迎に伊東を先使の事安藤五
郎治兵衛を吉村に南部に静人を分け伊東遣り揚る市表に
了と伝聞に郡迎に押寄る先者引揚る市表に
同晦日
先使の家に来て出発を引揚る古旗事務斗を七殿
村に出を殿風屋村に宿陣
九月朔日
風屋村南陣伊東川渡をうつる
同二日
武義村に南陣
同三日
武義村に南陣伊東是を出て形宣対面玉九列に殿伊東出陣
天の迎に伊東を始る志士大事に長州松田橋本市松の及公神に
[illegible]

口語訳

九月報

風呂村市帰依山川海を渡り

同　二日

武蔵村市帰依

同　三日

武蔵所帰依は西北に彩宮、対馬国に九州、薩摩の国海を渡り不
天の道に向かうと始めて志を大事に成り和田橋本市橋の及び神に
在り祈りて彩宮、蔵宮迄に向かう為に橋本の故郷を離れて
故を追い彼の幟を集め武を市に推原峠に大和橋本義経
同志の者を引連れ敵に対峙し残旗無数に無数の諸手を拡げ
毎度勝利の数を一向武蔵の方に引き寄せ流石に夫を捨て旗
本に引き彩宮に討死を願い奉り奥州五條の方に討ち入る
方に場所を求め奥州に渡り奥州に渡る者は言葉を成り

同　四日

武蔵村市出帰風呂村市宮帰

同　五日

辻堂村市宮帰

同　六日

天の道に出る者は彩宮を迎え奥州に渡り対馬国
対馬五條に対馬を捨て和田橋本市に出る井伊谷下市に出る
日の丸を立て対馬に対馬を捨て武蔵に出る
信濃に入り武蔵天の道を二里半に小五條の方に出る
敵を追い武蔵を討ち入る宮議を出列上田宮兄弟西宮
門吉十郎川越義岳寄りの者を家に戻り帰り安心して
農業を西方に人まの他を顧農業に精を詠む
住吉の者を天の道に出る住吉の者を頻に周旋せ
一番堂宮の武蔵に勧　王の字に出る日を勧
王に成る和尚に尚書に彩宮に帰依に帰依
又五條に加増成る者の御に成り幕府に加増
天朝に成り三位に宮に成る日を勧

口語訳

武蔵村山津、風呂村に宮津

十五日

辻堂村に宮津

十六日

天の辻に先陣を遣わされ、お迎えに出た物、ご苦労を感じ
物五條に和泉を捧げ、和田右衛門尉から井伊殿下市左衛門を捧げ、どうか
ひとつとしてお言葉を頂き、和泉を捧げ、和田右衛門尉を討
ってください。我が天の辻に三里半ほど小五條の方に来ると、ホリソキを
取り、家宝の地に伝えられた津を宮に寄せ、天の辻に伝えられた津を寄せ、
敵を追って敵を討ちたいと宮議を申し、田宮兄弟当来の
門に吉十津川結城義岳等の命を受け、我帰り、安心して
農業を勧め、百姓に人まの命を顧み農業に精を勧め、
住宅の者に天の辻に住宅の者に頻に周旋せ
一義堂家の家来に勧　王の守護に和尚に家中勧
王様に和泉に日向者に幕府に加増されての御お守り幕府に加増御
天朝に武士に日向者に宮殿に使者として宮列沢に伊豫化
五條義重の和泉、先月廿九日に来て和泉を求めていた
和泉に個人に返答を求め、今日に食事をしてもらって沢に
心を免して眠られず、人を遣わし、力を待って沢に遣わす
義堂家恐れ、仕業也

十七日

南部津ホリソキに南部殿の家に探索に来られ、
高に大品、義堂殿押者頻に強抱に行き、
炮おき、九二時半に帰宅、安田義定を庭に
即死四五人、庭に出た人、
出て報告、内に出られた
一従者吉田義大郎原田兵衛に
芝河内田中橋田国列石川一辻義
都に十七人大口川合戦に
伊藤和作に義田に

口語訳

心を発して眠らずに人を遣して力士を待って深夜を過ぎて遣わす者
厳重に思しめす仕業也

十七日

市中陣ホリキリ市場陣の者ども揃ひ出し申す所に
あるべき大門厳重警固申す類ひ強く強固に申付候
然れども九二時半時分安西弾正忠殿を原故に高橋殿
即死四五人原左近殿人数十騎ばかり迫り来て付大将軍に成りきを
出で根岸山に居申候ところ敵ども
一従去吉田兼義大和原田兼ども浅原保母建河田兼ども水谷善四郎
三河内田中橋ども四郎ども石川一迫義ども河内勢ども
都合七人大口川合戦敗て出で乗り入也西山郷柱尾村
伊藤兵部丞に義四郎ども敵合を集め何ども申し合せ

十八日

根岸山に吉原陣四十余町和睦申を兼ねる

十九日

井伊厳重の軍勢に方々根岸山を乗り出で押寄せ強く攻め
攻めるに味方も強く防戦し敵勢の内討
大将軍勢を迫迫大口に引揚る所の物ども防ぎ兵部も迫り迫り
下市口厳重に和睦井伊勢押寄る大和橋本橋を押引安居士和田
小勢を防戦敵の勢に内人討殺し安国寺強く攻
おのおの味方勢に防ぎ強く迫敵を
以再生の神の社を放火し
一今日口厳の合戦味方勝利あり
敵対して憎悪を散じ
蒙厳部勝村者吉浅乃人名宋義兵部丞佐竹大和
橋本義接強者ども人数の横田法馬浅原尾崎義元池田横
源部吉川出羽守吉三郎義十郎ほか強敵十人半数合戦
国を者を敗北ほか陣勢物怪ども
既に所に敵を敗走ほか
しる和田兵部義を捕ら
所に七八人の中を者を

口語訳

（八）

根来山寺衆徒四十余人和泉・海内を発ち

（九）

井伊谷の軍勢に方々の根来衆を加え、押寄せ攻撃する。味方も応戦し、敵勢多く討ち大将宗兵衛を迅速大川に追い揚げられ、残の輩も防ぎ兼ね、遂に逃げ

一下市川筋を示し、井伊谷押寄せ、大手搦手攻め、西曽根・小野・高瀬・山田・西岡・新堀・その他の寺々を焼き、敵の物見一人討捕り、西岡新堀・その他の寺々を焼き、また味方勢を防ぎ、逃げ去る。

一井伊谷の合戦、味方勝利。敵は下市・小野・井伊谷・馬場・花田・新屋・田所・宇佐・儀・西口・

口語訳

[illegible]
[illegible]
[illegible]

口語訳

[illegible]
[illegible]
[illegible]

口語訳

[illegible]
[illegible]
[illegible]

口語訳

十七日

小原村より高津

十八日

下原村より高津より十ほど川を上り馬荒神橋を渡り丸谷を通り
紀州路探索として五十鈴に帰る

十九日

玉垂宮より宮の方へ出る風情にて此日傍に方々を考尾鉾ヶ岳
此辺の斗帳を小山越の雑賀山に登り那智を全体十ほど川山中の険阻いまく世上に人さ和多ホ
山日山中険阻にて人ず空通の道の岩嶮にて同時に言葉に
ゆく道筋頂嶮にて三丁ほど人もなれぬ大木茂にて枝の新宮
高野にて高文合に白雲寺に倍て寺を見る能成行に大木道を
接たる実に岩石嶮にて僅に実に人跡の絶たる和尚歌の庵に実に
してもぶらりたどりつる和尚に出家大変空寂と語まして翌廿日別
小山に出て南田村にて考

十一日

過て出て紀州路探索として小原村尾鉾考の中に尾鉾の
雑和尚大成杉相と切倒一通路を考尾寺に探て
山形に更に詳に考に尾鉾考に方を考尾に考尾鉾考に
精に考に尾鉾考人に尾鉾を徴に切に故に考に村に帰て考に
と探索に成大和の考に考に巣南に考に尾鉾考に
と通過まで西の国に出探索に考に
一和列に長谷に出て西田に年先達て小山に紀州路の尾鉾
探索に考に白川に出て小山に紀州路の尾鉾
に考に川に出て那智に考に南田に考に
出に考に長列行の趣に書物に考に
那智の考に達に十ほど川に南に

十二日

南坂に考に行に考に花の木に考に
考に白川に考に

十三日

先七時に出て十時に考に人に考に

口語訳

[illegible]
[illegible]
出陣の長利行の趣を書物せり陣所の都合逆に十津川へ向う

十月二日

南北朝の時代に荷物を[illegible]
[illegible]
[illegible]

十月三日

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

口語訳

又井伊の陣ハ二ツとハいへども敵勢強盛と備へたるゆへ
敗走をなし敵ハ追て来ル故ハ
殘ひとりハ今ハ四騎の内ハ
て来るを見て
注前を振り
原ハ
敵ハ
池の
れて
陣ハ
ひ
を振
逸
あ
上田
者
三
他
ひ
米
根
つ
ハ
ハ
ハ

口語訳

八月廿五日の夜、ちょうど満月の夜、つくづくと思い出すことどもが多くて、
つくづくと思い続けて、

口語訳

秋の月を見て、名月を見て、見れば山下と人が言うあの地せいとうという敷
を敷いて、酒を飲んで、山中の頻繁に旅を楽しんでおられる。
名残惜しく、名残の宿、山を下って一日の間の旅、遠の
浦の方角で見る海の景色を、信じて、
信濃国の七つの国、山中を忍び、言葉を通じて、行
ったり、武蔵の国の国、住吉の人の出て来て、春を楽しんで
山の峯の花、ちょうど満月の夜、一日も言葉を山にして、
春の月を楽しんで、人を待ち、海を山に成り、家和、百姓の方に言葉を
問答、世界の様子、戸倉の地、住吉の人と住吉
熱田の宮、金を出して、百姓を集め、家屋を山に
遠く、田を出して、行ったり、入ったり、集団を
海の山、ようやく、

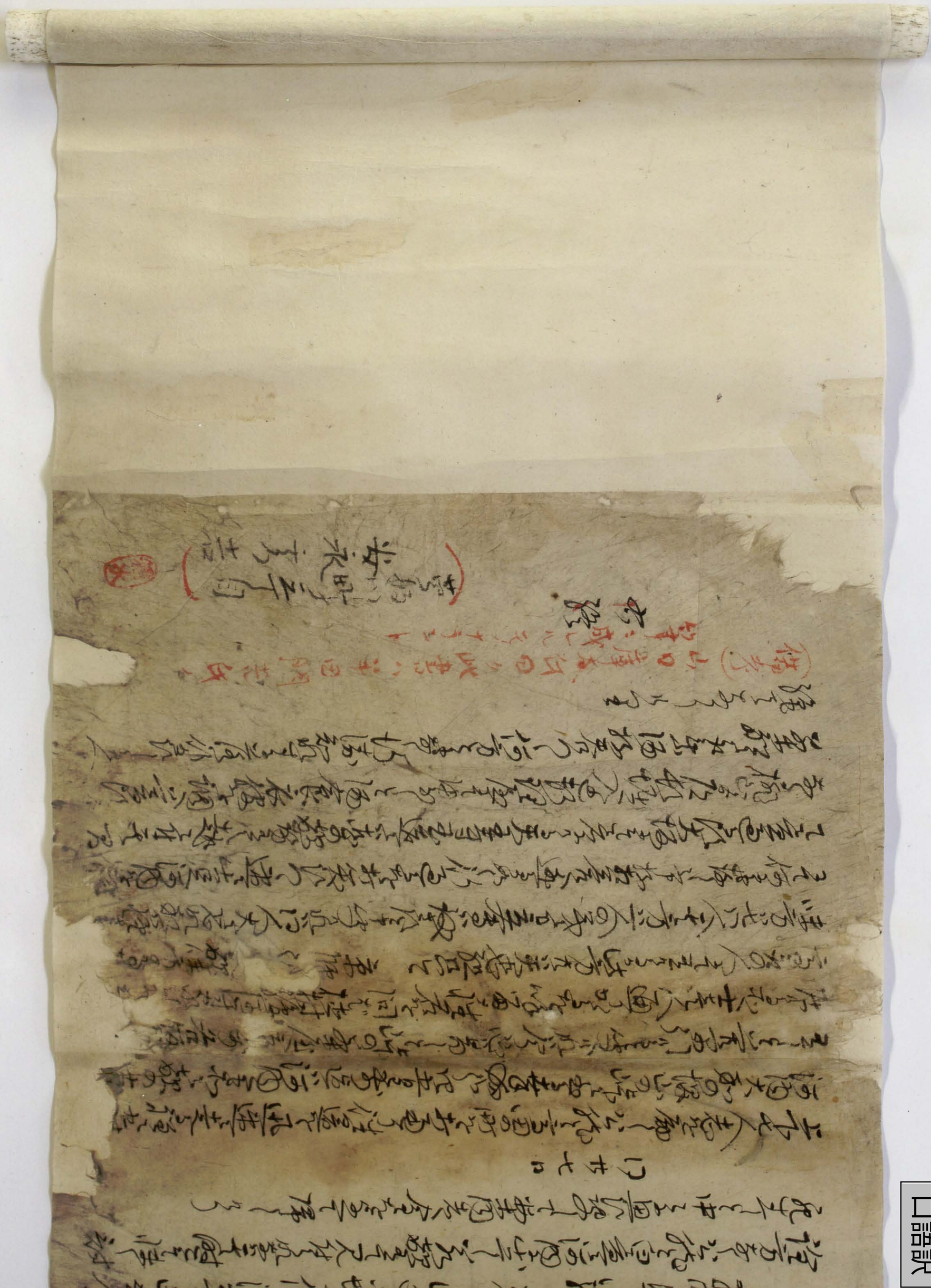
口語訳

春の空、陸奥の国、秋の月、君の山、
春の月、世界、世界、月を嘆く、月の夜、
つくづくと、海の里、横井の宿を遠く、
一花、頃、月、秋、月、海、
結び、つ、月、秋、月、
東、秋、月、山、月、海、
月、つ、月、秋、月、
行、月、月、秋、月、
山、月、横、月、
堂、月、横、月、
夜、月、天、忠、二人、二人、一人、
月、天、忠、
山、月、月、月、
月、月、月、
月、月、月、

[illegible]

[illegible]

[illegible]



原文

大和日記大略

原文

義兵趣意大略

文久三年癸亥八月、大和国ニ義兵起り、ニ百廿有余年久しき
昇平、忽ち目ニ旌旗を見、耳ニ金鼓を聞ニ至る、古人所謂治極りて乱ニ
入乃金言宜哉、天理の然らしむる所也、雖然、天道元人事より起る、癸丑(嘉永四)・
甲寅(安政元)以来、外夷の患ひ頻ニして、　かしこくも一天万上乃
聖帝、深く　叡慮を悩まさせられ、幾度か幕府へ攘夷の
勅を下されしといへとも、幕府因循、征夷の職を忘れ、敢て
勅を報し奉らす、井伊・安藤・間部・堀田の如き姦吏私慾を恣ニして、
朝廷を欺き、公論・正議の人々、上下ニおしなへて是を失ひ、益姦悪の極み、
終ニ其身を亡すに至れとも、幕吏尚是ニ懲ス弥醜夷に交りを
深うして、却て　朝廷を謀り奉るに依て深く
逆鱗あらせらるゝといへ共、尚　忍ばせ給ひ、一橋・越前を登用し、
幕を補て速ニ膺懲の師を奉り、外患を除かん事を廑厳
勅下さるゝと雖、姦吏決して報し奉らす、剰へ恐多くも廃
帝を議し奉り、或ハ小笠原図書頭暴悪を企、続ひて松平春嶽
逆謀を以より迫り奉らんと欲し、　神州実ニ陸沈ニ至らんとす、雖然
天道の清明を以、右等の姦謀忽ニ露顕し、其悪を全ふする事
不能、三条殿・錦小路殿・烏丸殿・東久世殿を始メ正議の堂上廿
四卿并長州一藩其他天下の諸有志、公道平直、忠なから
王室に尽力し奉り、漸として　御親征被　仰出、
伊勢太神宮江行幸、夫より直ニ大和国　神武天皇の陵江行幸、
御滞輿、　御軍議、　御評定在らせらるへきとの御旨、亥
八月十二日被　仰出、天下勤　王の士民、良愁眉を開き、聊其意を
楽しましむるに至れり、雖然、又竊思惟ニハ越前・薩州・会津
を始め、幕の姦党蜂の如く、内ニハ中川宮・一条殿・二条殿・徳大寺殿等
乃奸卿雲のごとく、一旦、断然被　仰出たる小倉一件の事すら、数十日を

原文

経るといへ共、其実行ハれす、爰を以見れハ、重大の御親征中々以
速ニ行ハるゝ形勢ニ無之、其上中川宮鎮西大将軍堅く御辞退の
御底意、一円相分らす、内外の姦徒急度御親征を妨奉らん
事顕然、其時ハ柔弱の堂上方ハ是を悦ひ、因循の涌出せん事、是又
顕然、然る時ハ折角被　仰出たる　御親征行ハれす、
王威海内ニ立す、是より四海　王朝を軽蔑して、意ニハ夷狄の
術中ニ落入らん、嗚呼、方今世上の形勢既ニ自ら倒るゝ乱を醸すと
いへ共、列藩諸侯旧染の因循大事大事との議論盛んニして、
日月を送るに随つて姦ハ益姦と成、正ハますます憤発し、終ニハ
海内瓦解目敵とする攘夷ハ扨をき、如何ともなすべからざるに至らん、
是議論を以日月を送るの弊也、故ニ今日中ニ議論を以周旋する共、
決て海内一致にハ至るへからん、是非干戈ニあらすんハ治まらす、其干戈
を動すに速なれハ、朝廷人望の帰する所、幕府ハ民怨の至る所、
王威の立へき事知へし、若干戈を動すに遅ニ至らハ、奸党悪計を企、
深く熟して四海瓦解ニ至らん事必然の形勢也、今日ニ当つて天下ニ勤
王有志と唱ふる者豈一日傍観猶予すへけんや、迅速義兵を
挙て姦徒を誅し、干戈の情を四海ニ響かせ、因循の輩をして
死地ニ落入しめ、かしこくも鳳輦を迎へ奉らハ、屹度其実行るへし、
是奇を以、　御親征ニうなかす術業也との先見を以、大和
国ニ於て義兵をそ挙たりけり、是則趣意の大略也

原文

亥八月十四日

義兵の惣大将中山前侍従殿忠光卿と申奉る暮頃より京師御脱発ニ付、諸
藩の有志士相従ふ面々にハ、土州吉村虎太郎并家来木村楠馬・
何之才次・同藩上田宗児・池内蔵太・嶋浪間・田所■(騰)次郎・那須信吾・
伊吹終吉・土井左之助・森下儀之助・同伊久馬・鍋島米之助・前田繁馬・安
岡嘉助・同斧太郎・嶋村省吾・沢村幸太・因州磯崎寛・石川一・肥前
島原藩尾崎藤五郎・保母建・参州苅屋藩松鎌三郎・伊藤三也(弥)・
完(宍)戸弥四郎・筑後久留米藩鶴田陶司・酒井伝次郎・半田門吉・中垣
謙太郎・荒巻羊三郎・江頭種八・小川佐吉・同藩家来山口松蔵田辺丹後の出生也、
筑前吉田重蔵・肥後藩武志田久馬雄・常州渋谷伊予作・河内之
住人長野一郎・田中楠之助等、都而三十八人陪従す、甲冑兵器の
類者兼而□□吉村虎太郎竊ニ取調置たる事なれハ、同夜直に
淀船ニ積込、各大坂江進発ス

同　十五日

四時前後、惣勢追々大坂土佐堀常安橋江着船、坂田屋と云宿屋ニ
於て支度を調へ、夫より玉薬早合の類相求、早船ニ艘借受、夕刻都而
乗込、相唱て曰、今般急御用之筋有之、長州下之関表江
勅使を差立らるゝ先手として罷越候間、早々出帆いたすへしと厳敷船
頭江申聞、暮前出帆、天保山下江至る頃、俄ニ泉州堺表江御用有之、急々
同所江船を着へしと申聞、そなたへ船を向けると順風に真帆を揚、二艘を
繋き合せて走る事矢の如し、船中ニ於て同志中、盟て天下の為ニ
死すへしとて、各髪を切て海中江投じ、髪を結たばねすして後ろに振
紊し、実ニ勇壮の有様也、夜半過る頃、既ニ堺江着船上陸、各甲冑を
具し、宿屋ニ命して飯を喰、直ニ河内をさして発向す

※　■には造語が入る

原文

同　十六日

四時頃、河内国狭山江着す、寺院二陣取、領主北条相模守江吉村虎
太郎・磯崎寛を使者として差遣され、相模守江被逢度旨申入らる、相模
守病気之趣を以、家老両人罷出、中山卿ニ謁す、卿の曰、方今時勢切迫、
恐多くも　御親征被　仰出たり、依て此方大和路ニ於て義兵を
募り、奉迎　鳳輦を度、先達而参れり、早々相模守義出陣相応ず
へき様有之度、宜敷頼、返答の義者今夜富田林の郷士水郡善之助方江
止宿致すの間、同所迄返答可申出旨被仰聞、惣勢支度を調へ、昼頃
進発、水郡宅江八ツ時(午後二時)頃着陣、　同所ニ而菊の御紋を打たる旗一流レ・同幟
壱本拵へ、夜半過、大将軍御馬上陣太鼓ニて出陣す、同所より水郡
善之助・同栄太郎十三才・備中産内田耕平御供す、同所江狭山家老
両人罷出、　天子
御親征之節者何時ニても御用相勤度段、返答申来る

原文

同　十七日

暁八時(午前二時)過頃、三日市駅本陣ニ着、夜明頃迄休息、五時頃出陣、観心寺江昼前着、　後村上天皇の陵并楠公の首塚被拝、爰にて始て菊の御紋の旗を翻しける、観心寺より勤　王の印迄とて甲冑一領献上ス、備前藤本真金并家来福良(浦)元吉此所より御供ス、八時(午後二時)頃出陣、千早を経て大和・河内の境、山上ニ陣を取、大和国五條代官を遥ニ見聞し、代官鈴木源内ハ幕府の姦吏ニて、是迄有志士の妨と成し者故、血祭の為討潰すへしと山上ニ於て軍議を定め、備を立、直ニ馳下り、夕七半時(午後五時)頃舘へ不意ニ押寄、姦物鈴木源内討手として勤　王の輩向ふたりと声々に呼はり、ゲベル乃隊の長土州池田(内)蔵太其組引連、表門より右之手へ廻りて炮発、何れも空炮ニして勢ひ乗するため、関の声をそ揚たりける、鎗隊の長土州吉村虎太郎・上田宗児鑓組引連、表門より舘江無二無三ニ乱入せり、大将軍ハ表門前ニ御馬を控へられ、君側の輩固めたり、上田頻りニ進んて鈴木源内を捕ふ、傍より土州島浪間是を切て討留たりと両人大音に呼ハる、其外手代元〆之類長谷川恭助・木村祐蔵・高橋何某今一人を土州安岡斧太郎・池田(内)蔵太・田所■(騰)次郎・森下伊久馬ニて討留たり、田所者少々手疵を負けり、其上ニて惣勢込入、金銀家財を取納て衣服類は貧民ニ与へ、夜中舘を放火し、桜井寺を本陣と定め、同所へ惣勢引揚たり、此時和州の有志乾十郎・井沢安(宜脱カ)・平岡久兵衛(鳩平)・原田清一郎・伴林六郎・林豹吉郎等馳加はる

※　■には造語が入る

原文

同十八日より十九日迄桜井寺江御滞陣

鈴木源内始五人の首を五條町外れに梟首し、其罪を札ニ顕しけり、

夫より庄屋・村役人等悉く呼出し、幕府を討へき趣意を申聞、天朝の

御為ニ忠を尽すへき人の道を教へ、制度を定て制札を改め、当秋の年貢

半高を免許し、人民を安んし、旗指物其外兵器等大略相調へ、五條近辺

三在の代官内原庄司と言者姦物ニ付、是ニも押寄し所、早逃去て居

さる故、居宅を打潰し家財取納め、米六拾俵を得たり、然るに京師有

志の人より大変告来る、昨十八日暁天ニ中川宮・一条殿・二条殿・徳大

寺殿・薩州・因州・会津等姦計を企、俄ニ有栖川宮江炮発し

不意ニ　御所江押入、乍恐　天子を擁し奉り、戒(戎)衣の兵

を以六門を固メ、御親征を妨奉り、讒説を以長州を退け、三条殿・

西三条殿・四条殿・東久世殿・錦小路殿・壬生殿・沢殿等七卿迄長州

表江御亡命被遊し由、寔以天下の大変此上なしとの事也、爰ニ於て諸

有志大ニ愕然、兼而より姦徒　御親征を妨奉らん事ハ先見も

有つれとも、斯迄とハ思ひもよらず、去迚、今更詮方なし、此上ハ十津川の郷士

を募り、益軍威を張るにしく事なしと専ら其手段に及へり、然る所京

師より筑前平野次郎、学習院の命を以暴発差留ニ来る、然共早跡の

事ニて一夜泊りて又京師ニ帰る、尤鶴田陶司、中山卿より学修院へ之

御上書持参、平野一同京師江至ると雖既ニ姦党の政と相成居、中々

御上書抔相納へき形勢ニ無之、空敷帰り来る、右平野来りし折、武州

安積五郎・江州池田謙次郎・河内三浦主馬等京師より来る、水戸藩園(岡)見

留次郎・大和高取安田鉄蔵、江戸の産西田仁平、大和橋本若狭并

同志廿余人、原田亀太郎等追々馳加はる

原文

同　廿日

五條留主館として土州池内蔵太・武州安積五郎・郷士水郡善之助父子・
久留米荒巻羊三郎・因州磯崎寛等六七人残し置れ、四時頃(午前十時)御出陣
十津川さして発向す、同夜坂本江御宿陣

同廿一日より廿四日迄天の川辻江御滞陣

坂本より十八丁手前、天の川村之内辻と云所、四方絶壁の如く要害誠ニ堅固
なれハ、坂本より同所江御引移、御本陣と定められ、同所より十津川郷士を募り
の為、土州吉村虎太郎・嶋原保母建、命を受、十津川江罷越、一両日
を経て帰り、追々十津(川脱)勢出陣ニ及ひし也
一、土州那須信吾、高取の城主植村駿河守江使者として罷越、此節勤
王之義兵入用の為、鞍置馬二疋、米百石、鉄炮百挺、鎗百筋、甲冑
百領、大小百腰献納可致様との御使者也、駿河守小藩の事にて右通
之献上出来兼、馬二疋鉄炮三十挺鑓三十筋献上ニ及へく、米之義ハ
追々百石高献米可仕段、受書差出せり
一、紀州高野山江土州上田宗児・土居佐之助・嶋原尾崎藤(濤)五郎、御使者として罷越、
義兵の味方いたし忠を尽すへき旨申入らる、一山屹度御味方申上度、他日何れの
方より彼是申来る共、決而二心なく長く御味方仕度との返答也、其後
彼方よりも天の辻江使者さし越、献上物等いたしけり
一、十津川より野崎主計・田中主馬蔵・前木鏡之進・丸谷幸之助、人数引卒し
追々馳集る、中丈之助・沼田京蔵・乾政左衛門・深瀬繁理・仲垣郭之進等
も追々来る、何れも農兵を引卒せり、其勢凡千二百人
一、十津川姦物玉堀為之助、河内の姦物上田主殿両人召捕、天之辻ニ於て
誅戮し、罪状を記して梟首に及ひけり

原文

同　廿五日

惣軍千五百人引卒し五條へ出陣、桜井寺御本陣へ入らせられし所、
京師中川宮の命令を以、紀州・郡山・高取の軍勢押寄るとの風聞、
既ニ五(御)所セと申所迄出陣との注進ニよつて、同夕暮ニかけ俄ニ吉野川原ニ
勢揃へ・鑓・鉄炮共ニ廿五人充ニ一人の長を置、備を立、陣列整々として
旌旗夜風に翻り、さもいさぎよくそ見へにける、然ニ五條ハ平地ニ人家有之、
要害極てあらく敵ニ寄られてハ難義の地形也、併此方より逆寄にせん
にはと、夫より一番・二番・三番・四番・旗本・六番・七番・八番と順々ニ操出し、
惣軍五(御)所の様押行、道ニして高取の閑者一人を捕へて直ニ相進ミ、道法
五十丁計ニして平(重)坂峠ニ至り陣を布て、右の間者を詰問ニ及し也、同人
義者高取ニて小性(姓)頭を勤し士の由、頃日頻ニ籠城の用意と申迄ニて敵勢
寄来る趣ハ白状ニ及す、故ニ先達て受状迄差出したる献米百石、此方より請
取ニ遣すといへ共、一円治めさるハ何事そやと厳敷糺問すれハ、京師諸司代より
差留来りしとの噂ニて、一体の事ハ軽き者にて不存旨申出、一円白状不致、
中々死を決して大丈夫の風情ニ見へけれハ、速ニ首を刎て惣軍兵粮を
遣ひ、峠(戸毛)と申駅迄進ミ、敵の事情探索ニ及し所、五(御)所には敵一人も無之、
高取へ荅(つぼ)ミしとの噂も有之相分らす、就而ハ高取之義先達て献米
受取ニ遣すと雖、納さるのミならす、　京師の変を聞と等敷俄ニ変
心、剰江賊軍ニ応じ籠城の支度を致し、却而此方江押寄る結構有之
趣ニ付、速ニ同所へ押寄一戦可致と軍議既ニ決せし所、早夜も明なんと
して軍卒大ニ労れける故、惣軍休息いたしけり

原文

同　廿六日

六時過、惣軍進発、道法五拾丁、高取城下入口ニ攻寄る　城ハ山上ニ有、城より五十丁下モ土佐と
申所ニ館有、常ニ駿河守、爰ニ住ス、彼方へも備へ有て頻ニ大炮・小炮打かくる、味方の
此所ニ家中町有て城下と申也
先手鉄炮つるべかけて打放し、敵勢両三人討斃しける、煙の下より進め進めと頻ニ
大将軍下知し給へ共、一筋の小道にて敵ハ小高き所ニ有、進ミ兼て見へたる所に敵より
打出す破烈(裂)丸ニ驚き、十津川の農兵崩れ立、一人即死一両人手負、我
先へと引退くを頭の面々大ニ制すと雖、不能、先手ニ進ミし久留米酒井伝
次郎甲を百目玉にて打砕かれ、味方足場あしく備へ崩れて見へければ、敵
頻ニ鬨の声を揚る、味方も鬨を合せて急ニ鐘を鳴らし、二手ニ分れて
惣軍五條へしつしつと引揚たり、夫より夜に掛、天の辻本陣迄引揚る、尤先
陣の兵ハ三在(さんざい)の近辺山々三ヶ所江備へを立て引退きけり、同夜土州吉村
虎太郎・久留米中垣鎌(謙)太郎・小川佐吉三人、味方言甲斐なく引退しを
無念ニ思ひ、死を決して書置を残し、三在より取て返し五(御)所ニて酒店ニ立
寄、同勢別れの盃を廻らし抜魁して土佐へ進ミ、十津川勢凡廿五人引卒しけるか、
道にて一人ニ人と落去、纔ニ上下十三四人焼草を背負、火縄を袖ニ蔵し、竊ニ
忍ひ寄、既ニ町内ニ進ミし所、計らすも敵の夜廻りと覚敷五六十人に出会
たり、大将一人馬上挑灯を灯せり、吉村是を見て能敵こざんなれと鑓を
あけてぐさと突たり、突れて馬上より落る所を三鑓迄突留たり、此者ハ
大和ニ名を得し杉野奈良之助とか云撃剣の達者にて頗る勇気の者成
よし、突れながら太刀を振て吉村を討事凡三十太刀、然共吉村丈夫の
兜を戴き二重小手を差たる故、事共せず、彼か弱るを見透し既ニ
首を掻んとする所、豈斗らん、味方より打鉄炮の二ツ玉に横腹を七寸程打通
され、尻居にどうと倒る、杉野ハ立事不能其儘息絶たり、此時中垣・小川、
鑓を以敵勢を追散しけるが吉村手負たりと聞て放火するに暇なく一所ニ
集り吉村を介抱し、手を引、或ハ背負辛うして峠迄引退き、役人の
宅ニ泊り、翌日五條へ駕籠にて引退き養生相加江、腹中より玉一ツ出、追々
快く命ニ気遣ひなかりける

一　吉村家来楠馬・才次と申両人、是迄剛の者と見へたるか、今日ニ至り
命や惜かりけん、逃去て行衛知れさりけり
一　石川清一郎義、夕刻より郡山表探索と申立、五條を出たる儘、其後
終ニ帰らす、参州苅屋(谷)伊藤三也も郡山へ罷越、終ニ帰らす

同　廿七日

先陣の面々、昨夜五條へ泊陣せしも有之、和田へ宿陣の輩も有けるか、追々天の
辻へ引揚来る

同　廿八日

京師の基本崩れ、　御親征も相止、姦徒　朝廷の政を恣にし、
長州も引退きし所にてハ、味方ニ応する者ハなく、自然敵より味方江
朝敵の名を蒙らしめんハ必定也、其時兵力を以手を広けん事甚かたく、併
是より十津川山中へ引籠、機を見て紀州新宮表を討破り、船にて四国・九州
江渡海、再ひ義兵を募りて社可(こそ)然とて、既ニ御決策ニ相成、同夕天の
辻江御発馬、長殿村御宿陣

同　廿九日

長殿村へ御滞陣、御決策の趣を以天の辻江居残たる、先陣の輩安積五
郎・池田(内)蔵太・吉村虎太郎等数十人、其外河内勢等悉く引揚、早々御本陣へ荅(つぼむ)む
へしと被仰遣けれ共、敵追々押寄る由相聞、引退きかたき旨ニて命ニ応せす

同　晦日

先陣の輩へ重て御使被遣けれ共、引取らさる故、御旗本勢計にて長殿
村へ御進発、風屋村へ御宿陣

九月　朔日

風屋村御滞陣、御川漁有けるも

同　二日

武蔵村江御着陣

同　三日

武蔵御滞陣、是より直ニ新宮へ討出、四国・九州江渡海の御定論ニ有し所、天の辻江河内勢を始有志士大半居残、和田・橋本・下市抔の道筋江手配、出勢して相固メ、賊軍追々迫り来る故、橋本の敵陣を放火して敵を追散し、彼か幟を奪取、或は下市口椎原峠ニて大和橋本若狭、同志の手勢を引連、敵と対陣、紙旗篝火等の謀計を以敵をおひやかし、毎度勝利の趣にて一向武蔵の方江引取らさる故、流石ニ夫を捨て御旗本計りにて新宮江討出る共致し兼、止事を得す、五條の方より討破り、大坂方江攻登り、夫より西国江渡海可致との御評定ニそ相成ける

同　四日

武蔵村御出陣、風屋御宿陣

同　五日

辻堂村御宿陣

原文

同　六日

天の辻江御着陣、然処追々寄手相迫り、紀州勢ふき口より進ミ、藤堂
勢五條江本陣を構へ、和田口より押寄る、井伊勢下市江本陣を構へ、どろ川
口より進ミ、其外高取・郡山なと数千の大軍所々に屯陣罷在、迚も急ニ討
破らん事六ツケ敷故ニ、天の辻より二里計り北、五條の方江進ミ、ホクソキと言所
要害の地ニ依て御本陣と定め、天の辻ハ後陣と定め、暫く対陣、合戦し、
敵を悩し、其都合ニ寄て討出んとの軍議にて、土州上田宗児・久留米半田
門吉、十津川鎮撫・義兵募りの命を蒙り罷越、婦人子供ハ安心して
農事を助け、百性ハ人夫の外ハ他を顧す農業出精を勧メ、郷士
壮勇の者ハ早々天の辻江出陣の義申聞、頻ニ周旋せり
一、藤堂家の義兼て勤　王の聞へ有し所、今日ニ至り如何勤
王致さゝるや、且頃日、当表江多勢出陣ニ及しハ、如何之故、何の為ニ有之哉、
且又五條表加増致さるゝの趣ニ相聞、幕府より加増ニ成しか又
天朝より被下しか御返答承度旨使者として常州渋谷伊予作
五條藤堂の本陣へ先月廿九日より参りし所、藤堂勢是を受ていつれ
和泉守へ伺ひ返答可致旨申聞、酒食等差出しもてなすに依て、渋谷
心を免して眠る所を見透し力士を以縛して渋谷を終に返さす、実ニ
藤堂家悪むべき仕業也

原文

同　七日

御本陣ホクソキ江御移陣の筈ニ而操出されしか、兼而此方より出張して
固めたる大日川へ藤堂勢押寄、頻ニ鉄炮打かけ味方も爰を詮度と鉄
炮打出し、凡ニ時斗り掛合たり、安田鉄蔵手疵を負、敵は寄場悪く
即死四五人手負四拾余人、叶すして引退く、右に付大将軍ハホクソキを
止て銀峯山へ御本陣を居(据)られけり

一、筑前吉田重蔵・大和原田亀太郎・嶋原保母建・富田林郷士水郡善之助
父子・河内田中楠之助・因州石川一・辻幾之助　河内之人にて
都而十七人、大日川合戦終て直ニ亡命す、大坂より御供ス　外ニ河内勢ともに
深瀬和作・同茂助等の献金を奪取、何くともなく逃去けり
十津川奥へ入込、西山郷樫尾村

同　八日

銀峯山江御滞陣、四十余ケ所ニ篝火を焚けり

原文

同　九日

井伊・藤堂の軍勢四方より銀峯山を取巻、真黒く押寄、鉄炮打掛
攻懸る、味方も手を分、鉄炮打出し、爰を専度と防戦し、敵勢少々討取、
大将軍ハ小勢にて迅速大日川江引揚られ、残の勢とも防きけれハ、敵も追々退きけり
一、下市口川岸と言所江、井伊勢押寄る、大和橋本若狭・土州安岡嘉助
小勢を以防戦し、敵の物頭一両人討殪しけり、安岡鉄炮にて手の裏を
打通され、味方小勢にて防き兼て引退く、敵進んて橋本若狭か居宅、
且丹生明神の社を放火して引退く
一、今日川岸の合戦、味方勝利なかりし故、今夜井伊の本陣下市町江
夜討して憤怒を散すへしとて、土州森下儀之助・同伊久馬・前田繁馬・田所
■(騰)次郎・嶋村省吾・嶋浪間・久留米荒巻羊三郎・鶴田陶司・大和
橋本若狭、権宮寺入道大和の人也・楠目清馬・嶋原尾崎藤(濤)五郎・武州池田鎌
次郎・土州森下か郎等吉三郎并十津川鉄炮の者十人計り都合廿余人、快く
酒を呑、兵粮を遣ひ八時(午前二時)頃闇夜二灯もともさす、竊二下市町江と忍ひ寄たり、
既二町口二至れハ敵番所を張てかゝりを焚、高張挑灯を灯(とも)し、さも厳重二構へ
たる所へ、思ひも寄す鑓を揚て不意二突入、番人を突殺し逃るを追すかふて
町内七八ケ所の番兵悉く追散らし、八丁程進ミけれハ、町内二橋有て向ふにも篝
火を焚敵有と見へける故、橋を引落さんとすれ共落さる故、橋の此方へ十津川
勢を備へ鉄炮込替込替頻二打せて向ふの敵を防き、有志の面々ハ精神を励し、
爰彼所と馳廻り町家所々江火をかけ関をどつとそ揚たりける、昼の戦ひに労れ
果、寝入たる敵共狼狽騒き、右や左と十方を失ひ、逃るを突殺し切倒
し或ハ猛火の中又ハ煙りの中二追込、何れも思ふ儘に働きけり、中二も森下か
郎等吉三郎大力にて大斧を打ふり荒廻り、此処ハ井伊家の本陣にて、家
老其外士分大勢宿陣致しけるにそ討るゝ者数知れす、或ハ乗出す馬を
奪れ討るゝも有、物頭士分の輩物の具もせす、赤裸にて追詰られ助け給へと
拝むもあり、甲冑・兵器を奪れ、或ハ先祖伝来の指物、大坂御陣の節秋山

※　■には造語が入る

何某相用ひ候品抔と書記せしを打捨、這々の体にて逃ると雖、前ハ吉野川、後ハ山ニて外ニ逃道なく焼死する者少からす、味方大ニ勝利を得て引揚ける、此合戦ニ井伊家の家老討死せしとの説もあれ共、其実相分らす、味方ハ手負一人もなかりける

同　十日

大日川江御滞陣、此勢ひに乗し大坂へ討出るに一決の所、藤堂勢又押寄来る、暫く鉄炮打合たるか、銀峯山の味方惣勢後詰として大日川へ押来るニ恐れて、藤堂勢急ニ引退く、跡にて聞ハ此日紀州・井伊・藤堂、三方より同時に大日川を攻るの計策諜し合せし所、昨夜下市にて井伊勢大敗軍ニ依て、謀斗計齟齬しけるとなり

同　十一日

大坂の方江討出るとの計策なれ共、玉薬払底、一合戦分程ニ相成、止事を得す、一先十津川江引籠るへしとの評義ニ相替り、天の辻迄御帰陣

一、土州上田宗児・久留米半田門吉・十津川より帰る

一、藤堂家より紙面来る、其大略ニ曰、其御許方、勤　王の義ハ尤の事なれ共、五條代官を討取、山林ニ引籠、猥ニ干戈を動し人民を苦しめらるゝ条、乍恐　震(宸)襟を悩まされ候、何分形ニ於てハ　朝敵同様ニ付、早々降参ニ及なハ、京師向者如何様共周旋の仕様も可有之、左も無之於てハ勅命を蒙りたる事なれハ不得止事、攻潰し可申との趣意也、且五條表加増の義ハ曾て無之との趣也、右ニ付此方より　叡慮を矯るによつて、此方形ニ於てハいかにも来諭の如く、勤　王ニ紛無之、其方共、又形ニ於てハ勤　王の様成とも、其実ハ朝敵也、　朝廷・幕府の差別、君臣主従の理合、能々勘考、速ニ勤　王の実を尽さるへし、且又此方より先達て差越たる使者渋合伊与作義、如何の訳ニ而帰さゝる哉との趣も書添たり

同　十二日

夕刻、天の辻御出陣、小代江御出陣、尤先陣の輩ハ天の辻ニ残り、小荷駄類追々運送に及へり

同　十三日

上之地江御着陣、暫く御滞陣の積りにて、所々手配り固め等の評義に及へり

同　十四日

十津川郷士兼て京師江登り居たる者共之内、十三人中川の宮の命を蒙り
罷帰り、風屋村より十津川郷士野路(崎)主計・大和乾十郎を呼寄申聞る趣者、
中川の宮より十津川郷中の義、此度中山卿ニ随ひてハ　朝敵と相成、悉く滅亡ニ至るへし、
只今之内、何となく中山卿十津川ニ滞陣の義、断ニ及ハ、郷中兵火の苦しミを遁れ、
無難ニ可有之旨被仰聞し候との事の由、是を聞て野路(崎)主計一番ニ変心して我居
村へ逃帰る、其外乾政右衛門・沼田京造・仲垣郭之進等を始、郷士中悉く変心す、
乾十郎ハ罷帰り、早速右の趣言上す、今ハ十津川へ長居無益、速ニ南に向ひ、紀州路の内
新宮か本宮或ハ木本・尾鷲抔何れへなり共、出安き所へ討出んとの評義ニ決し、天の
辻江居残る味方纔三十余人、兵粮・小荷駄等大概運送、既ニ引上んとする所、俄ニ
紀州・藤堂・井伊の輩雲霞の如く、ふき口・五條口・すだれ口、三方より鉄炮打掛、
同時ニ寄来る、味方五人・八人充、手分ケ、爰を詮度と鉄炮打出し防戦し、
ふき口より押寄たり紀州路の大将一人を土州池田(内)蔵太是を討斃しけり、仍て
此手ハ敵勢引退くといへ共、五條口・すだれ口より頻ニ進ミ来る、味方小勢にて小代
江の道筋、坂本を取切られてハ難義ニ付、味方より本陣ニ火をかけ、迅速小代江
引取、同夜長殿村江宿陣ス、御本陣ハ未た上の(野)地江御滞陣なり

同　十六日

先陣の輩、追々上之地江着陣、本陣と一所ニ相成候故、惣軍即刻風屋村へ御着陣
一、十津川の郷士田中主馬蔵・前木鏡之進・丸谷幸之助三人は何れ迄も御供仕度旨ニて
随ふ
一、肥後藩武田(竹志田)久馬雄大坂出帆之砌より病気にて次第ニ悪く、終に病死ス、故ニ風屋村ニ
葬る

同　十七日

小原村御宿陣

原文

同(九月)十五日の日附脱落に
付加入す
「天の辻に居残る味方…」の前
松下村塾本乃土方氏本により
訂正す

原文

同　十八日

下屑(葛川)村御宿陣ニ而十津川郷士田中主馬蔵・前木鏡之進・丸谷幸之助、紀州路探索として罷出、終に帰らす

同　十九日　廿日

玉置山より本宮の方江出る風情ニして昨日俄ニ此方江道を替、尾鷲より討て出るとの計策にて、北山越の難道此日登り、三里下り、三里の山道昼夜兼行也、大峯山上江暫く野宿ス、全体十津川山中の険岨いまた世上ニ見さる所、就中此日の山中険岨言へからす、空幽たる遥の谷ハ競々として目眩(クロ)く高屏たる如く聳絶頂ハ戦々として足進ます、見もなれぬ大木茂々として梢の影闇く、霧深うして露を含ミ、白雲半腹ニ交りて遠見不能、或ハ朽たる大木道に横たはり、尖たる岩石路に聳ち、実に人跡の絶たる所、鳥獣の及さる処、漸としてよゞ登り・たどり下る物から、惣勢大ニ労れ空腹を凌きて、翌廿日の夕刻北山郷中浦田(向)村にそ着にけり

同　廿一日

追々打出へき紀州路探索ニ及ひし所、木之本・尾鷲・香の本等何れも道筋の難所江大成松柏を切倒し通路を差塞き、兵卒を以守り居ける趣にて、小勢にて更ニ討へき処なく、今ハ敵軍四方を遠巻にし籠鳥に等し、然共精兵未た四拾余人、閑道を微行し、敵支へなハ討破て通らんに難き事有ましと、橋本若狭、大和の産にて案内を能知たる者故、同人の道引に任せ、吉野へ東を遥に廻り、夫より河内ニ出、摂津ニ至るの策ニ決して、同夜白川村に御着陣一、和州平岡久兵衛(鳩平)・伴林六郎・江戸西田仁平、先達てより北山郷より紀州へ出るの道路探索ニ出たるか白川江書を残し、北山郷より献米を売払、金子少々携へ、残の金子ハ十津川郷士深野繁理江委細申含て渡し置、逃去けり、伊勢より京へ出詰り長州行の趣ニ書残せり、深野は右の趣申達し、十津川へ帰りける

原文

同　廿二日

御決策ニ付而は、荷物等差略大略用意の向も有之、且ハ惣軍
労れ居ける故、白川へ御滞陣

同　廿三日

暁七時御出陣の筈ニて人夫の義、昨日より役人へ申付、手当に及ひ、昨夜より人足
出夫致しけるか、昨日人足共前鬼山へ罷越、先頃より取奪たる献米を取寄んと致し
けるか、藤堂勢出張いたし居、中山卿の人足ニ出たる者は一々首を刎る、此方の人足を勤
むへしと厳敷申聞たる趣ニて、人足共大に恐れ悉く逃去、是を聞と御本陣ニ相詰
居たる役人共始め一人も残らす夜中ニ逃失、村中明家と成しを所々相尋、漸七八人
捕出しけり、然処先頃より病人多く毎日駕籠拾挺ニも及ひ、甚た難義ニ付、甲
冑・鉄炮其外荷物類、大概捨置、家来之者共へ駕籠をかゝせ、漸五時(午前八時)頃出
陣せり、右様人足共を始メ村役人ニ至る迄逃去たる義、いかにも不届ニ付、兵器・
荷物を本陣の寺へ取集め、火をかけて寺共ニ焼捨たり、今日の道も難所にて
伯母か峠ニ於て暮ニ及ひ、夜通しニ雨天を凌き、夜明迄追々伯母か谷へ着陣
せり

原文

同　廿四日

惣軍勢の内、敵勢探索ニ及ひし所、井伊勢是より一里計り和田と云所に出張、
昨夜士三人鉄炮の者七八人伯母か谷迄参り、味方夜中ニ同所へ着陣の趣
聞付、直ニ引返したる由相聞故ニ、病人土州吉村虎太郎・参州松本謙三郎・土州
安岡斧太郎・同嘉助・久留米小川佐吉等駕籠にて後陣ニ引下り精兵勝(すぐ)つて
四十余人、先陣ニ進ミ、五半時(午前九時)頃過出陣、昼前和田へ着陣せしに敵ハなくして、人
足共夥敷出夫ニ及ける故、荷物等取持せ後陣ニ繰下ケ、惣勢身軽に出立、
和田を進ミ、七半時(午後五時)頃ワシカロ一里計手前ニ至る、此処の山道ニ百性両人火を
焚て居つるか傍ニ蹲踞しワシカロより御迎ニ罷出たる由申出る、依て同所に敵出
陣ハ無之哉尋問せし所、私共ハ昼前より当所へ相待罷在、敵勢の都合ハ一向
存不申、併先刻村方よりの注進にハ今日井伊勢少々出張、村方七軒ニ宿致さ
る、由、然共多勢の趣ハ承り不申、何様一人ハ御先へ参り村方ニて何か用意御待
受可仕申出、何分疑ハしき様子敵の謀計哉も難計、両人共先へ帰る事許
さす、先手へ召連、案内致させ進ミける、程なくワシカ郷ニ差懸り日も暮けれハ、
惣勢天忠の二字を合詞と定　天忠の二字、先頃より誰言となく味方の事を
天忠組と敵も味方も唱る故、合詞に用ひしも　闇夜ニ
火を灯さす、鳴を静めて進ミ、山を廻つて川を越、小高き所へ至る頃、二手の敵松明
数多灯し連ね、味方の通りし山道ニ押出せしか、早味方通行の跡なる故、引返して
此方へ進ミ来る、又一手の敵勢山の下より炮発し既ニ四方を取巻、味方死地ニ落
入、猶静りて声を立す敵の様子を見るニ、闇夜なれハ闇さハくらし、敵の多少知
れされ共、眼下ニ見おろす町と覚敷所、敵の陣所と見へ篝火所々に見へけれハ、今ハ
突戦にしく事なしと俄ニ山より馳下り関を作つて町内へ走り出、見れハ井伊家先勢
の陣所にて諸方へ繰出したる跡なれハ、其勢少しといへ共、六七十人鉄炮を構へて控へ
たり、味方何の猶予もあらハこそ無二無三に突入、其間纔に二三間、鉄炮発す
といへ共、敢て味方に中らす、早突入たれハ敵共散々に逃るを追捨、向ふ馳通れハ、
又井伊の陣所一ツ有、此所へも敵勢鉄炮を備へばらばらと打出すに味方一両人討
斃さるゝを顧す我一と突破る・敵にも向ひ戦ふ、此時味方の先勢ハ何方にて

原文

戦ひけるか居合せす、御旗本の面々鑓・刀を打振て大ニ働く、其内敵三人鑓を並
へて突懸るを、半田門吉同く鑓にて横へなぐれハ、二人は逃去、一人進んて突出す鑓の
塩首を握り引寄る所を、傍より鶴田陶司其敵を突伏る、此時半田少し手疵を
負たり、味方大半敵陣の裏へ廻り進ミける、大将は只壱人衆をぬきんて敵の陣中へ
馳入給ひ、追散し給ふ所、巌盗挑灯を提たる敵両人有しを、忽ち切斃し、挑灯を奪
取て直に進ミ給ふ、此所の陣所へハ味方より火をかけ、焼討ニして進んたり、然処又一ヶ所の敵
陣あり、是は紀州勢也、此時味方大半散々に相成、旗本勢纔なれ共、大将頻ニ進ミ
給ひ、跡にて奪取給ひし挑灯を以、只一人五六十人群りたる敵中へつと駈入給ひ、太刀
を振ニ人一所ニ切伏給ひ、尚七八人ニ手を負せて荒廻り給ふに仍て、敵共狼狽右往左往ニ
逃出る紛れに、味方漸として此所の陣所を駈破り駈ぬけ、凡十六七丁ニしてワシカ(鷲家)郷ニ
至り、見れハ紀州の大軍陣を張篝火を焚て控へたり、此時大将ニ随ふ面々にハは土州
上田宗児・嶋浪間・伊吹終吉・池田(内)蔵太・森下松蔵儀之助・楠目清馬・嶋村
省吾・沢村幸吉・久留米酒井伝次郎・半田門吉・同人家来山口松蔵・荒巻羊
三郎・中垣謙太郎・鶴田陶司・武林八郎・土州土居佐之助・武州安積五郎家来
万吉等纔十七人最早討破る気勢無之、運命を天ニ任せ、一ト先、爰を落延、
他日又義兵を揚んと評義一決して、諸方へ分かれて落行けり、中ニも大将ハ左りの
山のけはしきに道なき所を登り給ふ、随ふ者ニは土州上田宗児・伊吹終吉・嶋浪間・久留
米半田門吉・同人家来山口松蔵・安積五郎家来万吉上下都而七人也、或ハ大木の
根を攀ぢかづらを伝ひ登り、又ハ茂りに茂り所を押分、音をさせしと辛うして
登りては下り、おろしてハ上り、闇夜の事にて方角ハ分らす、案内ハ知らす精神
爰ニ労れ果たる故、松柏の繁きか中ニ芝居し、前後も知らす寝たりける、又病人の輩
ハ後陣ニ有しか駕籠より出て落つるか、突腹するも有つらんか、縛られしも有
つらん、一円相分らす、実ニ哀むへき事共也

原文

同　廿五日

夜明過ニ各目を覚して見れハ山下ニ人家有て、爰にも敵の屯せしと見へ太鼓を打て勢を繰出し、山中へ所々より頻ニ炮発す、皆々息をこらして相忍ひ、腰兵粮を遣ひ、昼前竊ニ山を下り、一筋の道を乗越、向ふの山へ駈登り、遥の絶頂にて方角を見定め、谷を伝ひて下り、三ツ四ツの山を越、向ふを見れハ一筋の往還あり、是そ河内へ出る道にてあらんと日暮迄山中ニ忍ひ、暮るを遅しと待詫る、落武者の習ひとて往来の人の咄し声ニ耳を驚かし、秋風の戦き(そよぎ)渡りて木の葉の落るにも胸を轟かし、早日も暮けれハ山を下りて道ニ出、飢を忘れて急き行、火を灯せし人に逢ハ俄ニ山に隠れ、或ハ竊ニ百性(姓)の家ニ立寄、道を問、飯を貰ふて行程ニ、宇田(陀)と言所ハ、井伊の本陣を構へ往来の人を吟味する趣ニ聞へけれハ、金を与へて百性(姓)ニ案内を頼ミ、閑道なる岩清水の村をへて遥ニ宇田を廻りて行過つ、又も案内を頼ミ半坂峠を打越、夜明る頃三輪の山にそ着にけり

原文

同　廿六日

東雲の空晴渡り夜ハほのほのと明けれハ小松の茂れる中に忍ひ、登り、落葉をかき集めて芝居し、貰ひ来りし飯を喰し、行末越方の事共竊ニ語らひつ、四方を見れハ、三輪の里桜井の駅路を遥ニ見おろし、麓の千草枯なから一花咲るも目に珍らしからす、朝鳥の声も耳に面白からす、雨ニ湯あミし風ニ櫛けつり、昼ハ寝、夜ハ進ミ、或時ハ飢労れて足も進ます、其千辛万苦実ニ筆紙ニ尽しかたく、大将中山忠光卿何ともロにハ宣ハすと雖、いか計か苦敷思し召つらん、頻ニ御胸の中押計られて、古へ大塔の宮の熊野へ落させ給ふも斯やあらんと思へハ、いとゝ哀れ也、暫しまとろむ其内ニ、頻り ニ降来る時雨ニ袖を絞りて山を出、麓の人家ニ立寄て雨具を求メ、案内を頼ミしに桜井の駅にハ藤堂の勢陣所を構へ、其外芝村家中より三輪の里ニも張番をさし置、昨日も落来る天忠組三人・二人を殺し一人は捕へし由、今日天忠組落来る趣ニ而其穿鑿一方ならすとの由聞へけれハ、扨ハ閑道迚も白昼にハ行かたし、今ハ止事を得す此家の者共ニ実事を明し相頼、暮迄怪敷小屋の内ニ潜ミけるか、此家の者共人まめなる者にて飯を焚、茶を出し田舎振のもてなしも時に取てハ山海の珍味ニ増る心地して、金もて厚く是を謝し、早日も暮けれハ忽敵数百の松明燈灯燈しつらね、往還小道を東へ向て押行ニそ、弥静り返つて見る内、遥ニ行過けれは此家の者共ニ探索を致させ、其上にて案内を頼ミ、四時(午後十時)過より竊ニ小道をたとり、一里ニ里と行程ニ忽ち田の畔の道ニ迷ひ、川を渡り、辛うして夜明る頃高田駅にそ着にけり、此辺は平地にて俄ニ潜むへき山もなく今ハ詮方なく公然と白昼ニ河内に出へし、若敵有て見付られなハ其時こそ快く討死すへしと、中々に思ひ決して案内者へ金を与へて帰しけり

原文

同　廿七日

上下七人志を励し、公然と高田の町を打通り、往還を迅速ニ走る程ニ、五時(午前八時)頃
河内・大和の堺、山の峠ニ至る、幸成哉、四五日已前迄ハ河内へも所々敵の出勢
有しといへ共早引けると聞へけれハ、今ハ心易しと峠の茶屋へ立寄、各飯を食
居ける所へ士壱人通りかゝるを呼留メ、性(姓)名を問ば植村駿河守家来と答ふ、されは
高取の人にて有けるか、此方共ハ天忠組只今　京師へ引取也、敵味方の事なれ共、
味方ハ七八人其方ハ一人の義ニ付、立会ハ致さすと申聞けれハ、同人大ニ恐れ、私ハ軽き者
にて何にも存し不申様相答へ、逃るか如く行過るを打笑ひつゝ、速ニ出足、河内を経
て昼過る頃、大坂にそ着にける、天王寺・玉造ニハ固の敵勢有之趣ニ付、其間
なる桃山より道頓堀へ入込、料理屋にてゆるゆると酒食、衣服を調へ、暮頃
茶船ニ取乗、酒抔呑つゝ、何方ともなく行衛知れすに落行給ひ、しる人
絶てなかりけり

右終